

教育研究拠点の支援事業 平成19年度グローバルCOEプログラムの審査結果公表**関西大学「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」が採択****－周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出－**

関西大学では、文部科学省により今年度から開始された、教育研究拠点の支援事業である平成19年度グローバルCOEプログラムに「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成－周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出－」が採択されました。

このプログラムに採択されたことは、本学の「アジア学」の豊富な学術リソースの蓄積と国際化への取り組みが高く評価された結果と捉え、今後5年計画で「文化交渉学」という新たな学問分野を切り開き、国際舞台で活躍する関西大学発の若手人材を育成する教育研究拠点を形成します。

本学の「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成－周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出－」についての概要、要旨、および推進担当教授からの展望を次ページ以降にご紹介します。

■グローバルCOEプログラムとは

今年度から始まったグローバルCOEプログラムは、平成14年度から文部科学省の事業（研究拠点形成費等補助金）として措置された「21世紀COEプログラム」を独立行政法人日本学術振興会が継承する事業です。

我が国の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、国際競争力のある大学づくりを推進することを目的としています。

【この件に関するお問合せ先】

関西大学 総合企画室広報課 / 鶴丸、北谷

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL:06-6368-0075 FAX:06-6368-1266

<http://www.kansai-u.ac.jp>

グローバルCOEプログラム＜人文科学分野＞

機 関 名	関西大学
拠点のプログラム名称	東アジア文化交渉学教育研究拠点形成 — 周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出 —
中核となる専攻等名	文学研究科総合人文学専攻（中国文学専修）
事業推進担当者	拠点リーダー：陶 徳民教授、サブリーダー：藤田高夫教授・内田慶市教授 (全13名)

[拠点形成の目的]

■複合的アジア文化観をもつ人材の育成

東アジア世界を多対多関係の織りなす文化的複合体としてとらえ、それに立脚して国際交流や国際理解のための機関・組織で主導的役割を果たす人材を養成する。

■国際的発信力を持つ自立した若手研究者の輩出

世界標準としての3カ国語（英語、2アジア言語）の運用能力を持ち、グローバルな人的ネットワークのなかで世界水準を意識しながら活動できる自立した若手研究者を養成する。

■新たなディシプリンとしての文化交渉学の構築

「周縁アプローチ」によるパースペクティブの転換と文化接触の動態的把握によって従来の一国主義的な東アジア文化研究を革新し、新たな学問領域としての文化交渉学を世界に先駆けて構築する。

■国際的研究ハブの形成

各国で個別に行われている文化交流研究・対外関係史研究などを国際的ネットワークで結びつけ、東アジア各地域の文化研究をリードする研究ハブを形成する。

[拠点形成計画の概要]

■新専攻「東アジア文化交渉学専攻」の開設

人材養成とそれを支える研究の拠点として、文学研究科を改組し平成20年度に「東アジア文化交渉学専攻」を博士課程後期課程・前期課程同時に開設する。入念な研究計画書にもとづいて集団指導体制をとり、後期課程学生の半数は留学生を入学させる。課程博士に対しては「博士（文化交渉学）」の学位を授与する。

■文化交渉学を切りひらく人材養成の教育プログラムの展開

- ☐ 研究活動と密接に連携したコア・カリキュラムを設計し、方法論の洗練、地域文化研究の具体的諸問題の探求、フィールドワークを伴う調査研究を有機的に関連させて、幅広い視野を持った次世代研究者を養成する。
- ☐ 国際的発信力を強化するため、少人数制の集中的外国語教育速習プログラムを開発し、世界標準の外国語運用能力を習得させる。
- ☐ アジア文化の主要な教育研究機関と協力して留学生の交換派遣を拡大するとともに、共同授業プログラムを策定・実施し、それを基盤に若手研究者・院生の主導による「若手研究者国際学術フォーラム」を形成して、次世代の人的ネットワークを構築する。
- ☐ 本プログラムの遂行のためにCOE特別研究員・COE助教・PD・RAなど多様な役割を持つ若手研究者を雇用し、それぞれにインセンティブを与えながら自立して研究に従事するための経済的支援を多面的に行う。

■文化交渉学創生のための研究活動

従来の文化交流研究のパースペクティブを転換する「周縁アプローチ」の方法論を洗練・深化して、新しい学の体系としての文化交渉学を創生するための理論を構築する。その検証の場としてプログラム前半で、東アジアにおける中国文化の位置を相対化し、並行して「周縁地域」における文化接触の様態解明から周縁の相互関係が生み出す文化交渉のネットワークを導き出す。プログラム後半では、それを基盤にアジア文化研究のスキームを革新する文化的複合体としての東アジア文化像を提示する。

■国際的研究ハブ形成のためのネットワーク構築

アジア各国の自国研究において、他文化との接触・交渉を扱う文化交流研究・対外関係史研究などの分野は、必ずしも自立した学問分野としての地位を認められているわけではない。本拠点は、各国で個別に活動するそれらの研究者や研究機関を有機的に結びつけて、そのネットワークのハブとなる。それを母体としてレフェリー制の学術誌を有する国際学会を立ち上げる。

■本プログラムの特色および展望

採択されたグローバルCOE拠点は、東アジア世界における文化交渉の諸相を教育研究対象とし、地域文化の相互接触・衝突・変容・融合を動的に把握する「文化交渉学」という新たな学問分野の創生を目的としています。これは東アジアにおける文化を、多様な国々からの視点で、複数の人文学的方向から複合的に把握することのできる人材を養成するものです。

すなわち、文化的複合体としての東アジアの中で自己の研究を構築する理論と方法を身につけ、東アジアで活動するために必要な3カ国語（英語、2アジア言語）の運用能力を持ち、アジア文化を多面的・複合的に理解する能力を備えた若手研究者を養成します。

このような人材は大学・研究機関の研究者に限らず、国連地域担当官・外務省専門調査員・JICAやNGO職員など国内外の諸機関や国際交流の現場を担う組織にも必須の専門家であり、マスメディアやグローバル化する企業からも今後ますます求められる人材です。

人材養成とそれを支える研究の拠点としては、文学研究科を改組し、平成20年度に「文化交渉学専攻」を博士課程後期課程・前期課程同時に開設します。本プログラムの核となる後期課程においては、学生の半数は留学生とする予定です。

■基盤となる研究資源と拠点形成の目的

「関西大学のアジア学の資産と伝統を継承し、国際的発信力を持つ若手研究者を育てたい」

文学研究科中国文学専修 陶 徳民 教授（拠点リーダー）

われわれは、関西大学のこれまでのアジア学の伝統を継承し発展させていくことが重要だと考えています。この度、グローバルCOEプログラムに選定された「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成一周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出」は、半世紀を超える歴史がある東西学術研究所、およびアジア文化交流研究センターが蓄積してきた研究が基盤になっています。

例えば、大庭脩先生は『江戸時代における中国文化受容の研究』で、日本学士院賞を受賞なさいましたが、早くから英語で論文を発表されています。私は復旦大学の修士課程の時、中国の学会で大庭先生が英語で発表されたものを訳しました。また、大庭先生の『江戸時代における唐船持渡書の研究』などの東西学術研究所の叢書は、ヨーロッパの研究施設でも尊重されています。この本は、江戸時代に長崎に入港した中国船が運んできた書物のリストに基づく詳細な実証的研究です。その卓越した研究は、漢学のテキストの流通経路を明らかにしました。

今、関西大学には可能性に満ちたアジア文化研究の基盤となる学術資源がそろっています。江戸時代に懷徳堂、適塾と並び称された私塾である泊園書院の2万冊余りの「泊園文庫」。東洋史学の創始者である内藤湖南の蔵書3万3千冊を有する「内藤文庫」。魯迅研究者で魯迅の弟子であった増田渉・本学文学部教授の「増田文庫」1万5千冊。日本を代表する書誌学者の長澤規矩也博

士の「長澤文庫」。外交官の吉田伊三郎氏が収集したアジア関係・外交関係の和漢洋書2400冊、日本近世文学の第一人者の「中村幸彦文庫」など。これらの文庫が常に図書館にあり、特に貴重なもの以外はいつでも教員や学生が触れることができます。豊富な学術資源へのアクセスの良さも、本学の研究環境の特長です。

また、アジア文化交流研究センターでは、中国の典籍1万種全文の総合データベースである世界最大規模の「中国基本古籍庫」を、日本の他の大学に先駆けて導入しました。稀覯書の文字データ・版本画像の連結データベース「近代漢語文献データベース」もあります。アジア文化交流研究センターでは、研究例会を毎年18回、研究集会を年3回、国際シンポジウムを年1～2回開催し、研究紀要とニューズレター「還流」を発刊しています。

この日本有数の研究環境が、今回のグローバルCOEプログラムを実施する基盤になります。この事業を推進する担当者13名は、全員が関西大学の教員です。専門分野は、歴史学、言語学、文学、思想、宗教、地理学、文化人類学など広範囲にわたっています。東アジアというエリアと文化交渉というテーマに接点を持つ研究者が集まっています。

このコアのメンバー以外に、外部の先生方にも参加してもらいます。すでに一流の客員教授陣の招請にあたり、ハーバード大学、シカゴ大学、北京大学、復旦大学などから内諾を得ています。リーダーシップを発揮できる若手研究者を育てるために、最短距離で世界最高水準に接することができる環境を提供する予定です。

教育研究拠点形成の目的をまとめると、次の通りです。

◆複合的アジア文化観を持つ人材の育成

東アジア世界を多対多関係の織りなす文化的複合体としてとらえ、それに立脚して学術研究のみならず、国際交流や国際理解のための機関・組織で主導的役割を果たす人材を養成する。

◆国際的発信力を持つ自立した若手研究者の輩出

世界標準としての3カ国語（英語、2アジア語）の運用能力を持ち、グローバルな人的ネットワークの中で世界水準を意識しながら活動できる自立した若手研究者を養成する。

◆新たなディシプリンとしての文化交渉学の構築

「周縁アプローチ」によるパースペクティブの転換と文化接触の動態的把握によって、従来の一国主義的な東アジア文化研究を革新し、新たな学問領域としての文化交渉学を世界に先駆けて構築する。

◆国際的研究ハブの形成

各国で個別に行われている文化交流研究・対外関係史研究などを国際的ネットワークで結びつけ、東アジア各地域の文化研究をリードする研究ハブを形成する。

■グローバルCOEプログラムの内容と特徴

「国とディシプリンを越境する研究で、新たに東アジア文化像をとらえ直そう」

文学研究科史学専修 藤田高夫 教授（サブリーダー）

◇「文化交流」から「文化交渉」へ——キーワードの「文化交渉」とは？

関西大学の今までの蓄積を「文化交流」という枠組みでくくるなら、今回われわれが「文化交渉」という別の言葉を使ったのは、より広い学問体系として文化交渉学というものを構築するためです。

ぜひ超えたいものが二つあります。一つは国を超えたい。現状は日本と中国の交流史といっても、実はそれぞれが日本史、中国史という国別の枠組みの中に縛られている。2国間でさえそうですから、東アジア全体となると、国別の枠組み、例えば歴史研究であるならば日本史、中国史、朝鮮史、韓国史、ベトナム史など、各国の枠の中で他の地域、他の文化との交渉が扱われてきました。その国別の枠を超えてしまいたい。日本と中国という一国対一国の関係ではなくて、東アジア全体を視野に入れて考えていきたいのです。

もう一つ超えたいのは、各学問分野の垣根です。例えば、歴史学、言語学、文学、思想、宗教といった学問分野の中でやってきたことを、その枠を超えて互いにそれぞれの考え方や成果をぶつけ合わせていきたい。各領域が接触することによって新しいものが生まれてくるはずで

す。

従来の人文学を構成してきた要素は大事にしていかなければいけないのですが、それを越境し、接触したところに出てくる新たな可能性を受けとめる場を、われわれは文化交渉学として用意したかったのです。私自身、自分のやってきた学問分野を超えたところ、抜け出たところ

で新しいものができてるのではないかという期待を抱いています。

若手研究者に越境してほしいのは、国とディシプリン。この二つを超えて、それぞれの確実な研究蓄積の上に、同時に他の学問分野に対して開いていく姿勢を身につけてほしいし、それが従来の文化交流研究をさらに発展させていくことになると思います。

◇周縁に立つことで見えてくる中国文化像を提示——周縁アプローチとはどういう方法か？

中国研究を例にとると、従来の研究は、コアの部分、最も中国的なるものに集中して、そうでない周縁部分をそぎ落としてきました。つまり中心の部分から中国文化のエッセンスを摘出しようとする研究方法です。しかしそのように切り捨てられてきた周縁の部分にこそ、実はたいへん豊かな可能性を持ったものがあると考えています。むしろ周縁に立脚して、周縁から中心を見てみよう、切り捨てられた周縁にこそ中国文化のあるエッセンスがちゃんと残っているのではないかと。周りから見ることによって初めて見えてくる中国文化像の提示は、周りにいる人間だからできることです。これを周縁アプローチと呼んでいます。

第1段階として、東アジアにおける中国文化を、周縁から見ることによって位置付けていきたい。ただ、中心と周縁というのは相対的なものですし、時代によって動きます。第2段階と

しては中心をどんどん動かしていく、つまり周縁を入れ替えていくことによって、東アジアの文化像をとらえ直したい。私たちの予想では、そこで出てくるのは多対多の関係です。周縁諸地域の文化接触、その絶えざる連鎖という形で東アジアの文化像を見ることができるのではない。

そのためにさまざまな学問分野の担当者が、一応は地域に分かれます。北東アジア、沿海アジア、内陸アジア、アジア域外すなわちヨーロッパやイスラム世界から見た東アジアというように、担当分野を持ちますが、それは地域を研究するものではありません。その地域が中心となり周縁となって、それぞれが接触を繰り返してきた東アジア世界の姿を描くためです。

◇フィールドワークを伴う現地調査を実施——人材養成の教育プログラムの展開について。

このプログラムは、研究が教育を引っ張るのではなく、新しい人材養成が目的ですから、教育プログラムと研究プログラムが密接に結びついています。同時に、文化交渉学とは何をどのような方向で行うのかという理論と方法の研究も、プロジェクトチーム全体で取り組むべき課題です。

具体的なテーマはいろいろあるのですが、院生やポストドクトラルフェローのような若手研究者を、文化交渉上の重要地域に送り込むというプロジェクトを計画しています。例えば、絶えず外国との窓口であった長崎や対馬、琉球、アモイ、マカオ、台南、シンガポールなど、さまざまな異文化との接触の現場となったところで行う、フィールドワークを伴う現地調査を組み込んだ教育プログラムです。われわれはこれを「周縁プロジェクト」と呼んでいます。それぞれがテーマを見つけて、具体的な問題を探求し、それをぶつけ合わせていく時に、ディシプリンの越境が可能になるだろうと思います。現にアジア文化交流研究センターが昨年、長崎でやった時にはそれが可能でした。

◇若手研究者自らが人的ネットワークを構築

——このCOE拠点で学ぶ院生などのサポート面は？

COE特別研究員、COE助教、PD、RA（リサーチアシスタント）など多様な役割を持つ若手研究者を雇用し、それぞれにインセンティブを与えながら自立して研究に従事するための経済的支援を行います。大学院の博士後期課程に入ってきた人は、すべてリサーチアシスタントとして採用します。勉強と同時に研究の補助という形でさまざまなプロジェクトにかかわってもらいます。

3年間あるいは5年間、必死になって勉強してもらう環境をわれわれは作りますし、それを要求するプログラムです。徹底的にしごくことになりますが、修了した時に手にするものは、今までの大学院教育にはなかったものです。

また、アジア文化の主要な教育研究機関と協力して、留学生の交換派遣を拡大し、共同授業も実施する予定です。それを基盤に若手研究者・院生の主導による「若手研究者国際学術フォ

ーラム」を組織し、次世代の人的ネットワークを構築します。

若いうちから20年後30年後にそれぞれの国の学会を背負って立つであろう研究者との世界的なネットワークを、自ら構築しつつ歩んでほしい。一定の業績をあげた後により外国に出て行くというのではなく、最高水準の世界が初めからすぐそばにあるような環境で、リーダーシップを備えた創造的な研究者を育てたいと思います。

さらに、COE拠点の最終形態として、文化交渉学研究機構の下に独立大学院「文化交渉学研究科」の設置も視野に入れています。

<プロフィール>

陶 徳民 文学研究科中国文学専修 教授

1984年に復旦大学から関西大学に大学院交流研究生として来日し、大庭脩教授の薫陶を受けた。アメリカに渡り、プリンストン大学やハーバード大学で研鑽を積んだ国際派の研究者。専門分野は、近代日本の漢学から東西思想文化交流史に及んでいる。著書『懷徳堂朱子学の研究』『日本漢学思想史論考—徂徠・仲基および近代—』は、高く評価されている。

藤田高夫 文学研究科史学専修 教授

京都大学文学部東洋史学科を卒業、同大学院博士課程を退学後、研修員を経て1997年、関西大学に来任。専門分野は秦漢時代史を中心とする中国古代史。従来の史書に基づく研究から、木簡などの出土文字史料を用いた研究へとシフトする中国古代史研究を担う気鋭の研究者。その研究領域は、中央アジア探検史と近代の日中学術交流史にも広がっている。

以 上